浜松城時代の徳川家康展

浜松市立中央図書館

浜松読書文化協力会

浜松城時代の徳川家康展

開催にあたって

　今年は徳川家康が浜松城に入城した元亀元年(1570.2,15～1571.2,4)6月または9月から440年となります。浜松城入城から天正14年12月4日(1587,1,12)に駿府城へ移るまでの17年間は数え年29から数え年45の働きざかりの年代でした。浜松城時代の家康は老獪さはなく、強敵にも堂々と立ち向かう精気溢れる青壮年武将であり、戦国大名として東奔西走の戦いの日々を送っていました。家康はNHKの大河ドラマにも度々登場しており、昨年の「江」にも重要な役で出ていました。

　平成14年12月に「三方ヶ原合戦展」、平成16年12月「浜松城時代の家康の合戦展」を開催いたしましたので、今回は全般的な様子をとりあげることにしました。

浜松以前の家康

天文11年12月26日(1543.2.10)岡崎城で誕生、父松平広忠、母於大幼名竹千代。
天文16年8月2日?　駿府へ送られる途中で尾張の織田信秀のもとへ。
天文18年12月27日(1550.1.24)人質交換、竹千代今川氏への人質として駿府へ。
弘治元年３月今川館で元服・松平次郎三郎元信と名乗る。
弘治3年１月15日(1557.2.24)今川館で関口義広の娘(築山御前)と結婚。
永禄2年3月6日嫡子竹千代(信康)誕生。これ以前に元康と改名。
永禄3年5月12日今川義元が駿府を出発。元康も出陣。
永禄3年5月14日今川義元が引間(浜松)に到着。
永禄3年5月19日元康が丸根城を攻略、後に大高城に入る。
永禄3年5月19日(1560.6.22)今川義元桶狭間で討死。
永禄3年5月20日(1560.6.23)岡崎の大樹寺に入る。
永禄3年5月23日(1560.6.26)岡崎城に入る。今川氏から自立。この年に長女亀姫誕生。
永禄4年2月　刈谷の水野勢と戦う
永禄5年1月　織田信長と同盟へ。
永禄5年2月　駿府から正室と嫡男をとりもどす。
永禄6年3月2日　嫡男(信康)5才と信長の娘5才と婚約。
永禄6年7月6日　家康と改名。
永禄6年9月　三河一向一揆発生。
永禄7年2月28日　三河一向一揆鎮圧。
永禄7年6月20日　三河の吉田城を開城させる。三河国平定。
永禄8年3月7日　本多重次・高力清長・天野康景を三河の三奉行とする。
永禄9年1月6日　家康が遠江国引間城の家老江馬に誓書を与える。
永禄9年12月29日(1567.2.18)　松平から徳川に改姓、従五位下三河守となる。
永禄10年5月27日　嫡男(信康)9歳と織田信長の娘9歳と結婚。

［１］ 安城（安祥）松平家出身の家康

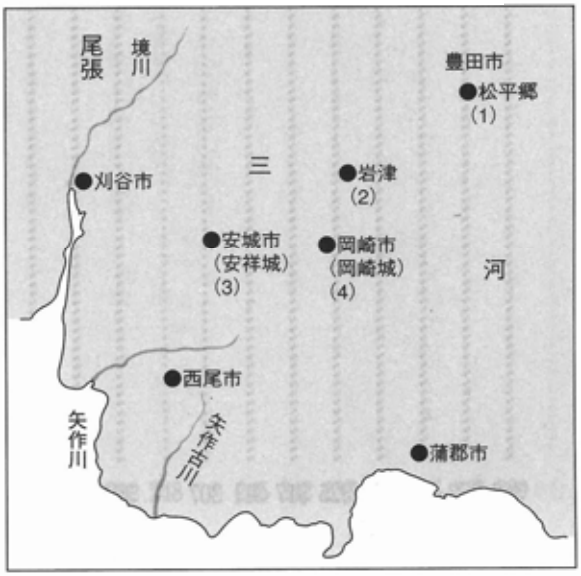
松平竹千代（徳川家康）は天文 11 年 12 月 26 日（1543.2.10）に三河国の岡崎城で城主松平広忠の長男として誕生した。しかし家康の家系は先祖代々の岡崎城の城主であったわけではない。三河国の松平一族の初代は松平親氏、２代目は泰親、３代目が信光といわれているが中村孝也氏によると「親氏・泰親の２代は松平郷時代であるが伝説時代」とされる。信光は家康から６代前の人物であり矢作川の東岸にある岩津城を根拠地として勢力を拡大していった。文明３年（1471）に安城の安祥城を占領し３男の親忠を入れて安城（安祥）松平家が始まった。親忠は本家の岩津松平家の支城を守る一武将に過ぎなかったともいわれる。親忠の３代目の安祥城主となったのは家康の祖父清康である。清康は若いが有能で勢力を拡大し、岡崎城へ移ったのは大永４年（1524）であり家康誕生の 18 年前のことであった。そして清康が 25 歳のときの天文４年（1535）に殺害されたので、岡崎城主であった期間は約 10 年であった。後を継いだのは 10 歳の広忠で、大叔父の松平信定によって岡崎城から追い出されてしまった。天文６年（1537）に今川義元の援助で岡崎城に戻ることができたが広忠も天文 18 年（1549）に殺害され岡崎城主であったのは約 12 年である。家康は安城（安祥）松平家の６代目・岡崎城の３代目であるが実質的に岡崎城主であったのは永禄３年（1560）から元亀元年（1570）にかけての約 10 年である。

本家の岩津松平家は断絶しており、清康と家康の実力によって松平一族の中での宗家といわれるようになったと考えられる。

徳川家康の略系図

①親氏（松平郷）
②泰親（松平郷）
③信光（岩津）　　信広（松平郷）
光重（岡崎）　④親忠（安城）　親長（岩津＝松平本家～断絶）
信貞（岡崎～大草）「清康に追われる」
⑤長親（安城）
⑥信忠（安城）
⑦清康（安城～岡崎）「岡崎の信貞を追う」
⑧広忠（岡崎～流浪～岡崎）
⑨家康（岡崎～駿府人質～岡崎）「松平から徳川に改姓」

松平家（家康関係）の進出略図



安祥城址

岡崎城址

［２］ 徳川家康の遠江への進出と平定

遠江国は駿河の今川家の領国となっていて、在地の武士たちは今川家の支配を当然のこととして服従していた。永禄３年（1560）に大軍を率いて西上した今川義元が桶狭間で討死してしまい、従軍していた遠江の武士のなかにも死者が出た。義元の死後今川家を受け継いだ氏真は戦国大名としての力量を疑われ勢力がおとろえつつあった。このため甲斐国の武田信玄を頼ろうとする者や三河国の松平家康に通じようとする者が出てきた。もちろん従来通り今川家に忠誠を誓い氏真に従う者もいた。

今川氏真は反今川武士を討伐しようとして「遠州忿劇」「遠州錯乱」といわれる争乱がおきた。永禄6 年末から永禄７年(1564)3 月にかけて各地で戦いがあったことが記録されている。引間城の飯尾豊前守は氏真軍に攻められたが城を守りきり、やがて氏真と和談した。永禄 7 年(1564)4 月に氏真が軍を率いて三河国の東部に進撃したときに飯尾豊前守も従軍していた。

永禄 8 年 12 月 20 日(1566,1,21)に氏真は駿河に呼び寄せた飯尾豊前守を殺害した、飯尾氏は滅亡したが引間城は家臣の江馬安芸守と江馬加賀守がかたく守っており氏真も引間城を手に入れることはできなかった。

三河国の松平家康は永禄 9 年 12 月 29 日（1567,2,18）に朝廷から徳川への改姓を認められ、従五位下三河守に叙任せられた。遠江国の在地武士の中には自力で遠江一国を平定することができるような強力な武士はいなかったので、家康は遠江への進出を企図していた。

永禄 11 年 12 月に甲斐国の武田信玄が駿河国へ攻め入ろうとしているとの情報を得た家康は岡崎から軍勢を率いて遠江国へと向かった。このときの経路には諸説あるが、岡崎～牛久保～中宇利～陣座峠～奥山～井伊谷～金指～橋羽の説が有力と考えられている。

なお、武田と徳川の間で今川の領国分割の密約があったとされている。

永禄 11 年 12 月 18 日（1569,1,15）に引間城では武田側につこうとした家老の江馬安芸守が徳川に従うつもりの江馬加賀守を殺したので加賀守の従者小野田というものが安芸守を殺した。そして小野田が家康のもとに報告し、家康はすぐに引間城に入ったがこのとき数え年 27 歳であった。

家康は久野城主久野宗能のもとへ酒井忠次を派遣し、説得させて味方につけた。久野宗能は領地を安堵され、徳川軍の一員として掛川城攻撃に参加。

高天神城の小笠原長忠は武田信玄につくつもりで人質を伴い秋山の陣へ行く途中で徳川の使者に会い、その説得を受入れて家康に従うことになり、掛川城攻撃に参加した。犬居城の天野藤秀は家康の働きかけに応じていなかったが、実際に遠江へ進軍してきた徳川の軍勢を見て家康に従うことにした。二俣城では城主が逃亡し、家康は鵜殿らに二俣城を守らせた。

武田信玄に攻められた駿河の今川氏真は逃げ出して遠江国の掛川城に入った。氏真の正室の実家である北条氏が駿河に出兵し武田軍と戦うようになる。

家康は掛川城を攻めるために出馬し、永禄 11 年 12 月 27 日(1569,1,24)掛川城下に放火した。掛川城の四方に付城をつくり、軍勢を入れて本格的な攻撃を開始した。

掛川城攻撃は続けられたが、掛川城主朝比奈泰朝は有能な武将であり、掛川勢も激しく戦ったので、徳川軍は掛川城を攻め落とすことができなかった。

家康は氏真に和議を申入れた。掛川城内は長い包囲に耐えていたが、食料もなくなり、氏真は永禄 12 年 5 月 6 日(1569,5,31)に開城を決心した。そして 5 月 15 日頃に掛川城を退去し掛塚の港から船で蒲原へ向かった。

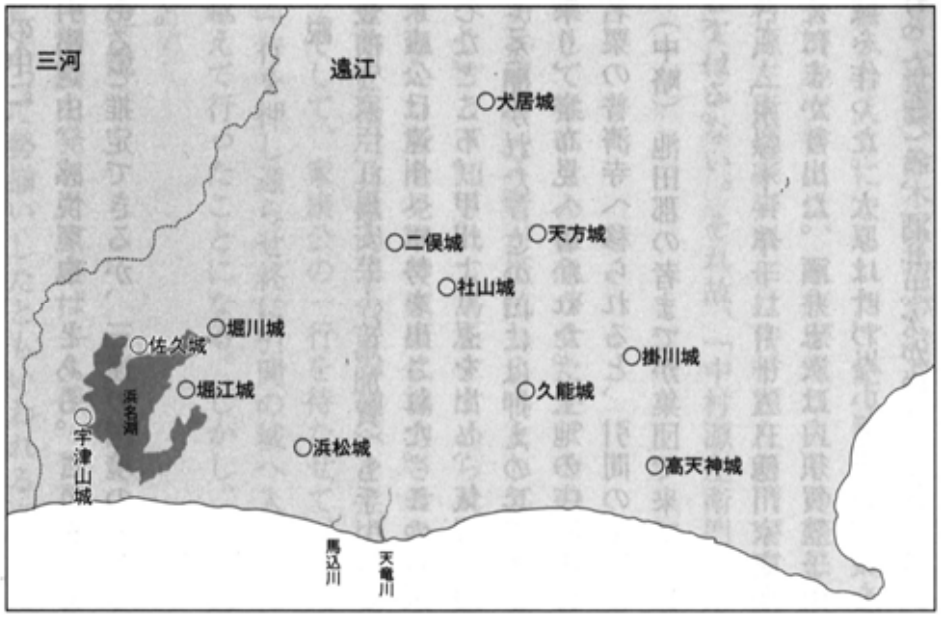
掛川城を攻撃している間に、佐久城の浜名頼広は徳川軍の攻撃を恐れて逃亡した。本多忠勝らは残った城兵に降伏を勧告し、永禄 12 年 2 月に佐久城は開城した。堀川城では反徳川派の一揆勢が立てこもっていたが、永禄 12 年 3 月 27 日(1569,4,23)に徳川軍の攻撃を受けて落城した。堀江城主大沢基胤

は今川氏真に忠誠を誓い、あくまでも今川家の武将として徳川軍と戦っていたが、永禄 12 年 4 月に家康の使者の説得に応じて徳川に従うことになった。

天方城主天方山城守通興は掛川城開城後も徳川に従おうとしなかった。家康は永禄 12 年 6 月に榊原康政らに命じて天方城を攻撃させた。天方山城守は激しく抵抗したが降伏した。

家康はついに遠江一国を平定することができたが、破竹の勢いで駿河まで進撃した武田軍をくいとめたのは北条氏の駿河への出兵があったからである。

武田信玄は北条軍との戦いと越後国の上杉謙信の軍勢が甲斐国を狙う動きがあって永禄12年4月24日(1569,5,20)に甲斐に戻った。そして武田の大軍が再び駿河に侵入し蒲原にせまったのは永禄 12 年 11 月 28 日(1570,1,14)のことであった。



徳川家康の遠江平定関係略図

堀川城址

久野城址

天方城址

［３］　徳川家康が築いた浜松城と元亀元年の動き

（１）　　見付での築城について

家康は遠江国の国府の地である見付（磐田市）に築城しようとしたという説がある。『当代記』「家康公、此秋より翌春中迄、遠州見付城普請在之」『三河物語』「然間見付の岡を御住所に被成、城を取、原に各屋敷をして」『磐田市史通史上』のＰ623 に「家康は永禄 12 年(1569)秋から見付城之崎に新城の造営に着手した」とある。

ところが『浜松御在城記』では見付築城は掛川城攻撃のためにつくられた陣城としている。また「信長より大天竜、小天竜が水を増したとき、川を隔てていると加勢が難しいからという説もこれで非なるべし」とある。『磐田市史通史上』の見解では、「永禄 12 年秋から」としているので、この時期はもう掛川城は開城した後のことになり、「遠江経営の拠点」と考えての見付築城となる。『磐田市史通史上』は『浜松御在城記』の陣城説を否定している。

『当代記』に「見付普請相止也、是信長異見給如此」とあり、家康が遠江での拠点として見付に城を築いていたが、天竜川が西にあり増水や洪水があると、徳川家の本拠地三河国や同盟者織田信長の尾張国との往来を妨げられる恐れがある。そこで家康は信長の意見を入れて、見付での築城を取りやめたという説が広く知られている。

（２）　　家康の浜松城築城

『三河物語』「茲は不可然とて浜松へ引きせられ給ひて、御城を拵給ひ、御住所を定めさせ給ふ」。『家忠日記増補』「元亀元年正月、遠州浜松の城造営構成て、大神君是に移給ふ」。『浜松御在城記』「元亀元年茲年の春、御普請出来につきて、岡崎を御長男竹千代江御譲り、浜松の御城江御移被為成候」『当代記』「此六月、縦見付浜松に家康公移給、先古飯尾豊前か古城に在城、本城有普請惣廻石垣、其上何も長屋被立、中略　三遠之輩、何も在浜松ス」九月十二日、本城に家康公令移給」

『浜松市史二』は『当代記』の記述をもとに「家康は元亀元年引馬城に移り、工事を急がせる。引馬城もとりいれ、その西方の高地に本丸以下惣廻りの石垣、長屋などをつくり、三河遠江の武士を移らせ、九月に改めて入城した。四月に越前に、六月下旬には近江に出征するあわただしいうちに工事が進められた」としている。

『家忠日記増補』の「元亀元年正月」説よりも『当代記』の説が知られているが「惣廻石垣」の記述は疑問がある。

（３）　　家康の築いた城の様子について

『浜松城跡―考古学的調査の記録』には「家康が入城すると、戦国大名の拠点として、城の拡張を始め、在城時に西は作左曲輪まで完成していたことは出土品からも推定されます。さらに、三の丸をはじめ南のほうへ城域を拡大させ、城下町を整備したのは、その後に入城した大名たちだといわれています。」

「浜松城の縄張りは南と東の厳重さに比べると、とくに北西側が希薄に見えます。これは作左山から現在の体育館に向けての自然の谷の存在と、下池川の低湿地などが天然の要害になっていたことからといわれます。この低湿地は、その谷自身の堆積作用よりも馬込川の堆積作用のほうが早かったため取り残された「溺れ谷」です。この谷を横断して北から城を攻めるのは実際、困難であったことでしょう。」

『家忠日記』の記述

- ◊　天正六年二月十一日、新城普請ふれ候て、十八日、浜松御ちんのひ候て、新城普請。
- ◊　天正七年二月九日、浜松より、家康以印判来十八日に浜松普請に越候へ由申来候。二十一日本田作左衛門尉かまへの普請候。二十三日～二十六日、同普請候。
- ◊　天正九年九月二十五日、酒左より、浜松普請に越候へ由申来候。九月晦日～十月十三日、同普請候。十四日、普請出来候。

『家忠日記』を詳細に調べても浜松城の普請についての具体的な場所や工事内容などの記述がない。出土器と「本田作左衛門尉かまへの普請」の文から西は作左曲輪まで完成していたといえよう。

（４）　地下に埋められた家康の浜松城

『浜松城跡―考古学的調査の記録』にはＰ40 に「家康の時代の浜松城については作左山に関連出土品があるだけで、かんじんな浜松城の中核域には何ら要素が見いだせないままでありました。堀尾氏時代の大改修によって、現存する浜松城の地下に埋もれてしまった可能性があります」とある。

現在の浜松城公園をよく見て回っても、徳川家康が築いた浜松城の確実な遺構とされるものを見出すことはむずかしいようである。

（５）　元亀元年（1570,2,15～1571,2,4）の動き（永禄 13 年 4 月 23 日元亀と改元）家康 29 歳

永禄 13 年 4 月　織田信長が越前朝倉氏討伐を企図し家康にも派兵を要請。家康は軍勢を率いて信長のもとに赴き、信長とともに京都に入る。

永禄 13 年 4 月 14 日、信長が将軍御所完成祝の能楽を開催。家康見物

永禄 13 年 4 月 20 日、信長、家康ら京都から越前へ出陣。

永禄 13 年 4 月 23 日に元亀と改元された。

元亀元年 4 月 24 日（1570,6,8）、織田・徳川軍が越前国敦賀の手(天)筒山城を猛攻し、落城させた。

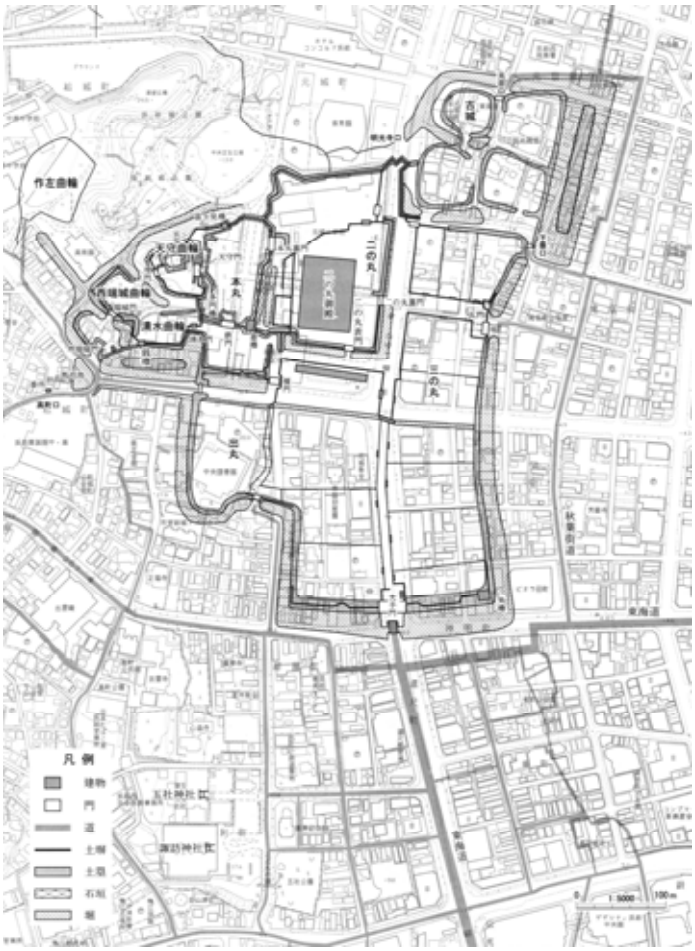
元亀元年 4 月 26 日、織田･徳川軍が越前国金ヶ崎城に入る。

元亀元年 4 月 27 日、北近江の浅井長政が裏切り、信長は撤退を決意。

元亀元年 4 月 28 日、羽柴秀吉を殿軍として、織田・徳川軍が撤退。

元亀元年 6 月 26 日、家康が５千の軍勢を率いて近江国竜ヶ鼻に着陣。

元亀元年 6 月 28 日（1570,8,9）、姉川の合戦が行われ、織田・徳川軍勝利。



浜松城地図

姉川古戦場跡

[４]武田信玄との戦い

（１）　元亀２年（1571,2,5～1572,1,24）家康30歳

『甲陽軍鑑』によると２月に信玄が甲府を出発し３月に遠江国の高天神城を攻撃した。攻め落とすことは諦めて掛川城や犬居城を経て去った。４月には信濃国から三河国に侵入し吉田城を攻略できずに引き上げたとしている。しかしこの元亀２年の信玄による遠江、三河への侵入はなかったとする説があり、本多隆成著『定本・徳川家康』が採用している。

・８月に浜松城で能楽が興行され竹千代（信康）の元服を祝う。

（２）　元亀３年（1572,１,25～1573,2,12＝閏月あり）家康31歳

・9月22日、家康は遠江国小国神社に武田信玄との戦いの勝利を祈願した。

・10月3日、武田信玄は甲府を出発し遠江・三河への侵攻作戦を開始した。

これまでの定説では「信玄率いる本軍は信濃国から青崩峠などから遠江国に入り犬居から天方城を経て久能城の西方に出た」としている。『当代記』には「十月武田信玄遠州出発、高天神表を通、見付国府江被打出」とある。元亀3年10月21日付の信玄書状の中に「当城主小笠原悃望候間」とあり、柴裕之氏は「当城主小笠原とは高天神城主小笠原氏助のこと、悃望とは降伏の願い出と考えられるとしている。これから信玄本軍は駿府から遠江に入り高天神城を攻めて城主小笠原を降伏させたとする。しかし天正2年に武田勝頼が高天神城を攻撃したときの城主は小笠原氏助である。信玄に降伏した筈の小笠原が守る城を勝頼が攻撃する必要があるだろうかなどの疑問がある。

・武田軍が見付の東に布陣しているとの情報に家康は本多忠勝らの偵察隊を出したが、武田軍に追われて一言坂で合戦となった。忠勝の活躍で無事に撤退。

・信玄は合代島に本陣を置き二俣城を攻撃させたがかなりの日数を要した。

・12月22日（1573,2,4）、武田軍は二俣城から南下して浜松城へと進軍した。しかし大菩薩付近から三方原台地へ上がり北へ向かった。家康は浜松城から出て武田軍に向かって行き、台地上で合戦（三方ヶ原合戦）となった。

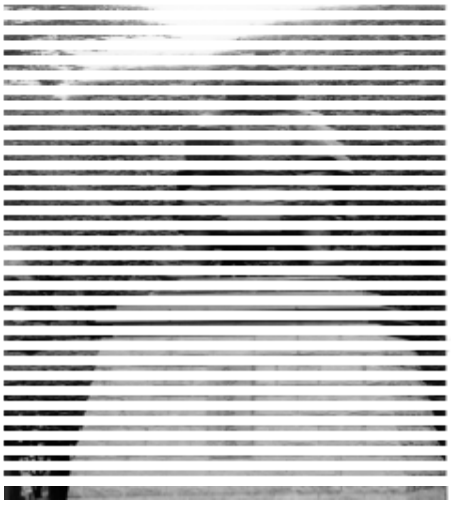
・信玄の本陣について『曳馬拾遺』には「此原に打出て信玄の本陣は都田の丸山にすえられ」とある。都田の丸山は三方原台地の北端部にあり現在は都田丸山緑地となっている。現地へ行き頂上部分からは三方原台地全体を見渡すことができ、東は天竜川方面、西は浜名湖方面、北は都田川流域や北方の山々が見られる。信玄の本陣の推定地の有力な候補といえるかもしれない。

・兵力が劣る徳川軍は敗北したが、家康や有力武将たちは無事に城へ生還。

・大勝した武田軍は浜松城を攻撃することなく、刑部郷の地に宿営し越年。

青崩峠

一言坂の戦跡



武田信玄銅像

（3）　天正元年（1573,2,13～1574,2,1）家康 32 歳

・1 月初旬に武田軍は刑部郷の宿営地から出発し三河国野田城へと向かった。

・武田軍は野田城を攻撃したが陥落せず、城の水を抜き 2 月に開城させた。

・武田軍は西へ向かわないで甲斐へ帰る途中の信濃国で 4 月 12 日に信玄死去。

・家康は武田軍が去ると 3 月に天方城可久輪城六笠一宮などを取りもどした。

・5 月上旬に家康は信玄の死を確かめようと駿河国に侵入し所々に放火。

・7 月から 9 月に家康は三河の長篠城を攻めさせ陥落させ松平伊昌を入れた。

・『甲陽軍鑑』によると 9 月に武田勝頼が遠州へ出馬し帰る途中諏訪原築城。

武田信玄進路推定略図

野田城跡

武田軍の遠江･三河推定侵攻ルート
「定本徳川家康」p８４からの地図

[５]武田勝頼との戦い

（１）　天正２年（1574,2,1～1575,2,20）の動きと高天神城陥落　家康33歳
・2月8日（1574,3,11）家康の次男義伊（秀康）が遠江国宇布見で誕生
・5月12日、武田勝頼軍が高天神城を攻撃。その後本・二・三の曲輪の堀際まで攻め寄せた。高天神城主小笠原長忠は浜松城の家康に救援を要請。
・6月10日、武田軍は二の曲輪の北側にある塔の尾曲輪を乗取った。
・6月17日(1574,7,14)に小笠原長忠は開城して勝頼に降伏した。
◆小笠原長忠（氏助）は1ヶ月余も武田軍の猛攻に耐えたが、徳川・織田軍の救援を得られなかったため勝頼の説得に応じたのであった。もし「元亀3年10月に武田信玄に城主小笠原が降伏を申し出た」ということが事実であったなら、なぜ勝頼が猛攻し小笠原は必死で防衛したのか疑問が残る。
・6月19日、信長が織田軍を率いて今切れを渡ろうとしたが高天神開城を聞いて進軍を中止して吉田に引き返した。家康も吉田に来て信長に礼を述べた。
・8月1日から馬伏塚城を修築して本格的な城として大須賀康高に守らせた。
◆武田勝頼が9月に天竜川へ出陣したという話が『浜松御在城』等にある。9月に勝頼が遠江国の大村、松井、本間等に領地安堵の書状を与えている。
（２）　天正３年（1575,2,21～1576,2,9）の動き、長篠の合戦　家康34歳
・2月28日、家康は奥平貞昌を長篠の守将とし、長篠城の修築をおこないより堅固な城とした。その後信長から送られた兵糧を長篠城に入れた。
◇4月に勝頼は軍勢を率いて信濃から三河へ侵入。所々に放火し長篠城へ。
◇家康も浜松から吉田城へ。
・5月11日に武田軍が長篠城の野牛門を、13日には瓢丸を攻撃。
・5月14日、長篠城から鳥居強右衛門が脱出し岡崎へ救援を求める。
・5月18日、信長が大軍を率いて設楽原に到着。家康は柵など入念に指示。
・5月21日(1575,7,9)織田・徳川軍と武田軍の合戦が行われる。
◆織田・徳川軍は連吾川沿いに2キロ余に及ぶ三重の馬防柵を構築し、大量の鉄砲を用意して待ち構えた。武田軍の一番は山県隊二番武田信廉三番小幡党四番武田典厩一党五番馬場美濃守と入れかわり攻めてきたが、鉄砲によって撃退させられた。明け方から午後4時頃まで戦ったが武田軍は山県馬場等の有力武将や多くの兵を失い、勝頼も敗走した。織田・徳川軍は柵から出て追撃して多くの敵を討ち取った。勝頼は無事に甲斐に帰った。
・5月25日、信長は岐阜に凱旋した。家康も岐阜に赴き信長にお礼をした。
・6月2日、二俣城を取りもどすために軍を進めた。
・7月に入り家康は諏訪原城を攻めさせた。
・8月24日、武田方の将兵が脱出し徳川軍は諏訪原城を攻略。
・8月末頃から徳川軍が武田方の小山城を囲む。
・9月中旬頃に勝頼が2万余の大軍を率いて小山城救援のために出陣した。
　家康は小山城の囲みを解いて徳川軍を諏訪原城に撤退させた。
・12月24日(1576,2,3)二俣城の守将依田信蕃が城を開き全員が退去
◆二俣城をとりもどした家康は大久保忠世に与えた。
（３）　天正４年（1576,2,10～1577,1,28）家康35歳
・2月23日　織田信長が安土城に移る。
・7月　奥平信昌が長篠城から新城城に移り、家康の長女亀姫が信昌に嫁ぐ。

・7 月（春説もある）犬居城攻略に成功し、城主の天野景貫は甲州へ逃亡。
・10 月(4 月説もある)武田軍の兵船出撃の報告があり、家康は中島与五郎に出撃を命じた。中島は舞阪から兵船を出港相良沖で船戦となった。
（4）　天正 5 年（1577,1,29～1578,2,16）家康 36 歳
・1 月 22 日　武田勝頼が北条氏政の妹と結婚し第 2 回甲相同盟成立
・5 月　武田の兵船が遠江今切で風待ちをしていたのを浜松勢が分捕ろうとしたが失敗。武田の兵船は走り去った。
・10 月 20 日、小山城に入っていた武田勝頼が大井川を越えて撤退。
・10 月 21 日、掛川から浜松まで国衆が引き上げ、信康も岡崎に戻った。
・10 月 22 日、浜松で普請があり、家康が馬伏塚から浜松に帰陣した。
・12 月 10 日　家康は正五位上から従四位下に叙せられた。
・12 月 29 日　家康は右近衛権少将に任じられた。
（5）　天正６年（1578,2,17～1579,2,5）家康 37 歳
・3 月 3 日、浜松より三河の松平家忠らに出陣命令がきて、６日には浜松へ。
・7 日に掛川へ、8 日には大井川端に陣取った。
・3 月 9 日、駿河の田中城を攻めて外曲輪を破った。10 日に牧野原城帰陣。
・3 月 11 日～18 日、牧野原城の普請がおこなわれた。
・3 月 13 日（1578,4,29）に越後の上杉謙信が死去。
・7 月４日～15 日、よこすか取出の普請がおこなわれた。
◇横須賀城の築城について、家康は高天神城を取りもどすために馬伏塚城を修復させたが、高天神城と浜松城との間にあって、より海岸に近い横須賀に新城を築いた。そして城主には大須賀康高を任命した。家忠が普請したよこすか取出（よこすかの城）は現在の城跡とは別の場所にあったという説がある。
・8 月 8 日、牧野城の堀の普請がおこなわれる。20 日に普請出来上がる。
・8 月 19 日、駿河口への出陣のために三河衆が浜松へ到着。
・8 月 21 日、家康・信康が小山城へ出動した。
・8 月 22 日、徳川軍が西駿河の田中へ苅田のため出動。家忠らの馬乗衆は大谷へ物見に出た。
・8 月 28 日未明に武田の騎馬武者 7、8 騎が牧野城際まで来襲した。
・9 月 4 日、西駿河から家康が牧野城まで帰陣。6 日に家康と信康が浜松へ。
・10 月 24 日、甲州勢が出動したとの報告があり、出陣命令が出る。
・10 月 27 日、信康が浜松まで出馬。28 日に浜松で 50 年来の大地震。
・10 月 28 日、牧野原城から敵が山を越えたとの情報が届いた。
・10 月 29 日、敵が大井川を越えたとのの報告により各軍勢が見付まで出陣。
・11 月 2 日、敵が小山相良筋へ移動したとの報告により、家康と信康が馬伏塚に陣取った。徳川の諸軍勢は柴原まで出陣した。
・11 月 3 日、武田勝頼が横須賀城のむかいまで出動。家康と全軍が横須賀城際に備えた。武田軍が高天神城まで引き取ったので徳川軍も本陣へ引く。
◆横須賀城近辺での武田、徳川軍の動きについて『改正三河後風土記』には「三日、大渕郷熊野鎮座の三社山に陣を移した。八千の軍勢は山麓に備えた。勝頼は進んでよこすかに攻め寄せようとしたけれども、三社山に家康が在陣しているので、塩買坂の本道をさけて浜辺を通った。武田の先手小笠原・小菅等は海辺から押して横須賀城を攻めた。城中には大須賀・筧等が鉄砲をうちたて防戦した。勝頼は軍を十七段に分けて入江を隔てて陣を張った。信康は自身で敵陣近くへ斥候して、一戦をするべきと申上げた。家康は敵が入江を越えて進んでくるならば、三社山から軍勢を下して敵にかかり戦うであろう。そ

うでないのに、こちらからかかるべきではないと仰せられた。内藤信成も味方を制して抑留した。勝頼も入り江を渡って一戦を挑もうとしたが侍大将等が諫めたので引き返し高天神城に入った」としている。『甲陽軍鑑』は天正４年のこととしているが内容をみると、「勝頼は全軍を十七手に備え、家康が軍勢を山から下ろして川を越えたならば、戦の決着をとげるための合戦にもちこもうと待っていた。しかし家康はとりあわなかった。勝頼は歩者を 30 人ばかり連れて横須賀城をくわしく見分した。高坂がこれを見ていそいで乗りつけて勝頼を諫めた。勝頼は本陣へ帰り、軍を引いた。」とある。

・11 月 12 日、勝頼軍は高天神城から引き、14 日には大井川を越えた。

・11 月 19 日に勝頼軍が青島から田中城まで引き、25 日には甲州へと撤退。

・11 月 30 日、徳川軍も浜松まで引き上げた。

武田軍と徳川軍は両軍とも互いに相手が仕かけてくるのを待っていて、実際に激しく戦うことはなく、合戦をおこなうことはなかった。

（６）　天正７年（1579,2,6～1580,1,26）家康 38 歳

・2 月 21 日から浜松城の作左曲輪の普請がおこなわれた。

・4 月 7 日(1579,5,13)に家康の三男長丸（秀忠）が誕生した。

・6 月 23 日に武田勝頼が駿府国江尻まで出陣したとの報告があった。

・6 月 25 日、家忠ら浜松城に到着、勝頼軍は高天神城郊外の国安に布陣。

・6 月 26 日、家康は夜のうちに馬伏塚まで出馬。信康も三河国吉田から馬伏塚まで出陣した。27 日には三河の軍勢が袋井まで陣を進めた。

・6 月 29 日、国安を引きあげた勝頼軍が大井川を越えた。家康軍も帰陣。

・8 月 29 日(1579,9,29)、正室築山御前が遠江国小藪村で殺害された。

・9 月 5 日、北条氏政が武田家との同盟を破棄し、徳川家康と和議を結ぶ。

・9 月 15 日(1579,10,15)、長男信康が遠江国二俣城で自刃。

・9 月　勝頼が駿河に出て沼津に三枚橋城を築く。北条氏政が小田原から伊豆国三島に出陣。黄瀬川を挟んで武田軍と北条軍が対峙した。

・9 月 17 日、徳川軍は駿河国進出のために掛川まで出陣した。

・9 月 19 日、徳川軍が駿河国持船城（静岡市用宗）を攻め落とした。

　勝頼は徳川軍駿河侵入を知り、北条軍へのおさえの兵を残し軍勢西進決定。

・9 月 25 日、武田軍の一部が駿府に到着したことを知り、家康は井籠（島田市）まで引き取った。28 日には井籠から牧野（旧諏訪原城）に移った。

・10 月 7 日から 18 日まで浜松で普請がおこなわれたが、工事内容は不明。

・10 月 19 日、家康が掛川へ出馬、24 日には牧野まで出陣した。

・11 月 7 日、松平家忠等が滝坂へ忍びの斥候に出て、敵の首を 15 取った。

・11 月 11 日、家康が掛川へ、12 日には馬伏塚へ移る。

・11 月 24 日、勝頼軍が駿河国田中まで来たとの報告あり。

・11 月 26 日、勝頼軍が高天神へ移ったとの報告あり。

・11 月 27 日、家忠らは見付まで出陣。勝頼軍が国安から引いた。

・11 月 28 日、勝頼軍が大井川を越えて退散。12 月 1 日家忠ら帰陣。

横須賀城址

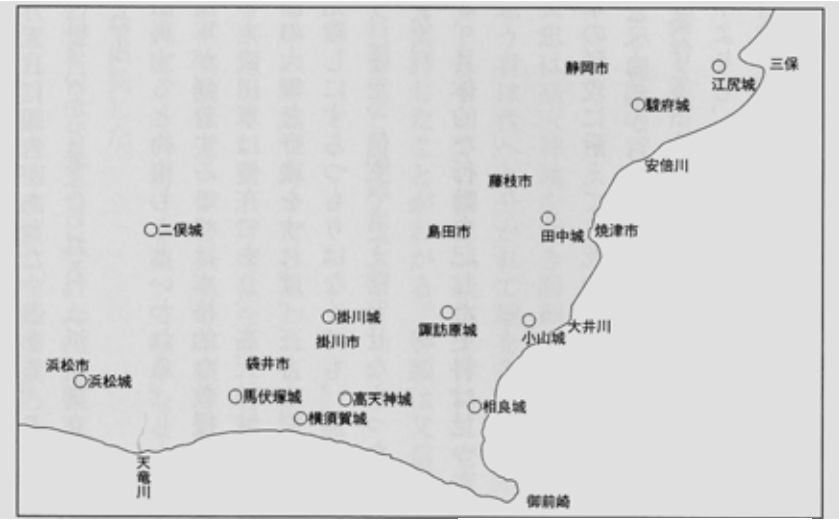
高天神城址

◆家康の三男長丸（秀忠）誕生について

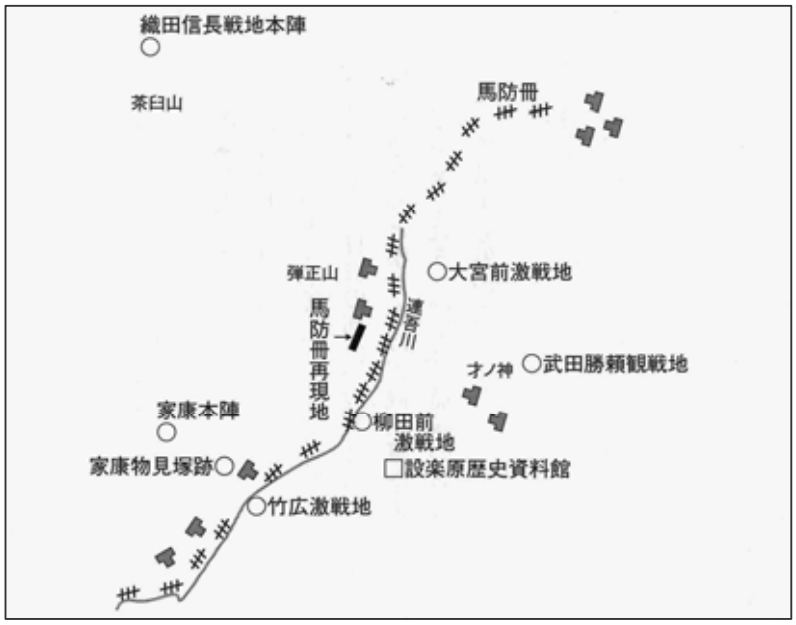
母は側室お愛の方（西郷局・宝台院）である。誕生地については浜松城内説と早馬説があり、新川交番の北側に「誕生井戸」の石碑がある。

浜松城内説の根拠として、３代将軍家光が五社神社に出した寛永１１年７月２日付けの社領寄付朱印状写の中にある「夫当社者秀忠公降誕之明神也」の文である。家光は寛永１１年７月１日に浜松城に宿泊し、浜松生まれで秀忠に仕えたことのある高力忠房の接待を受けている。２日に五社･諏訪に参詣し新しく社領を寄付した。五社明神は天正８年に城外へ移された。『随庵見聞録』に「四郎同道いて五社松、御誕生所、御本丸、作左曲輪迄罷越候」とあり、江戸時代のいくつかの浜松城絵図の中に本丸と二の丸の間に御誕生場が記されている。『浜松御在城記』に「天正七年四月七日台徳院秀忠様の御童名御長丸様、今の御城内にて御誕生被遊候」とある。

早馬説のもとは杉浦国頭著『曳馬拾遺』の中に「むかし秀忠将軍が天正七年の夏四月七日には生まれた。その屋敷の本当の跡であると里人が言い伝え今でも恐れて人も住まないでいる。その場所が今の城東早馬の町という所の西の藪の中にある。」とあるだけで、誕生の井戸の話はない。



武田勝頼との戦い関係略図



武田勝頼との戦い関係略図

[６]築山御前の死

（１）　築山御前について

築山御前は関口刑部少輔義広（親永）の娘である。母は今川義元の妹・義理の妹・叔母などの説があるが、井伊谷の井伊直平の娘という説もある。この場合は築山御前や信康・亀姫には今川本家の血は受け継いでいないことになる。築山御前についての当時の日記・書状や同時期の公平な立場で記録された信憑性の高い史料が発見されていない。生年月日や本名は不明である。

・弘治３年１月 15 日（1557）に 16 歳の松平元信（徳川家康）と結婚した。

・永禄２年３月６日（1559）に長男竹千代（信康）を出産。

・永禄３年（1560）長女亀姫を出産、但し月日は不明。

（２）　築山御前と信康の死の江戸時代の書物による事件の概要

①岡崎に残された築山御前が唐人の医者減敬を寵愛した。減敬は武田家から送りこまれた者で、築山御前も武田家に内通するようになった。

②築山御前が嫡男信康と徳姫の仲を悪化させるようにした。

③徳姫が父織田信長に築山御前と信康についての箇条書きにした手紙を送った。

④信長が酒井忠次と大久保忠世に手紙の内容について質問。二人が認めた。

⑤信長が築山御前と信康の処分を家康に命じ、家康は従うことを決断。

⑥家康が８月１日に信長へ二人の処分を申し出た。

（３）　築山御前の死と法名

天正７年８月 29 日(1579,9,29）に遠江国小藪村(浜松市富塚)の佐鳴湖畔で、家康の命令を受けた野中三五郎重政らによって殺害され、西来院に葬られたとされている。しかし、『家忠日記』には８月 29 日については何も記述されていない。築山御前殺害の様子を客観的・具体的に記した当時の記録は発見されていない。『幕府祚胤伝』に「西来禅院に葬り、法名西光院政岸秀貞大姉、百回御忌の時、青池院秋月大姉と改称す」とある。

（４）　西来院の築山御前廟について

『曳馬拾遺』の御前谷の項の中に「明暦（1655～1657)の頃にこの寺が消失した時に御霊屋も煙となり、証の石も砕け落ちて偲ぶにも、無残な有様になった。その後のある日、侍が来て築山御前のしるしは何処にあるかと尋ねた。

その侍は大久保加賀守忠朝の使いで、あとを弔うために２０石を寺に寄進した。延宝６年（1678）に百年の年忌をして、青池院殿秋月大姉と戒名をつけた。『築山御前考』（昭和 45 年発行関口昭八・柳史朗共著）に「息絶えた築山御前を輿から引き出して首を落としたが、それはもとより野中重政であった。中略　石川義房と岡本時仲は築山御前の首を持って岡崎に引き返した。そのあとは西来院の住僧が小藪台地の部落の人たちを呼び、築山御前の遺骸を収め、そこに葬った。その時の築山御前の法名は西光院殿政岸秀大姉と言った。多くの史書俗書には、すぐに西来院へ葬られたようになっているが、実はそれから百年の間、御前谷の現場に葬られたままになっていたのである。西来院に改装され、廟堂が建てられたのは、延宝 6 年（1678 年）のことで築山御前百回忌が行われた時である。」とある。しかし根拠となる史料が示されていない。延宝６年に百回忌が行われたとするが、当時の浜松城主青山家の資料の延宝 6 年の部分には百回忌の記録がない。浜松市史資料編一の中にある糀屋記録に享保 13 年(1728)に百五十回忌が行われたとしているが、当時の浜松城主本庄松平家の資料には百五十回忌の記録がない。『浜松市石造文化財所在目録』に「石塔（墓標）延宝 6,8,29(1678)築山御前の墓。清池院殿潭月秋天大淑霊と刻むが、この法名は延宝年間の百周忌で追号されたもの。灯籠。享保 8,8,29(1723)、築山御前の介錯人であった野中重政の子孫である野中重羽が建立した一対。」とある。

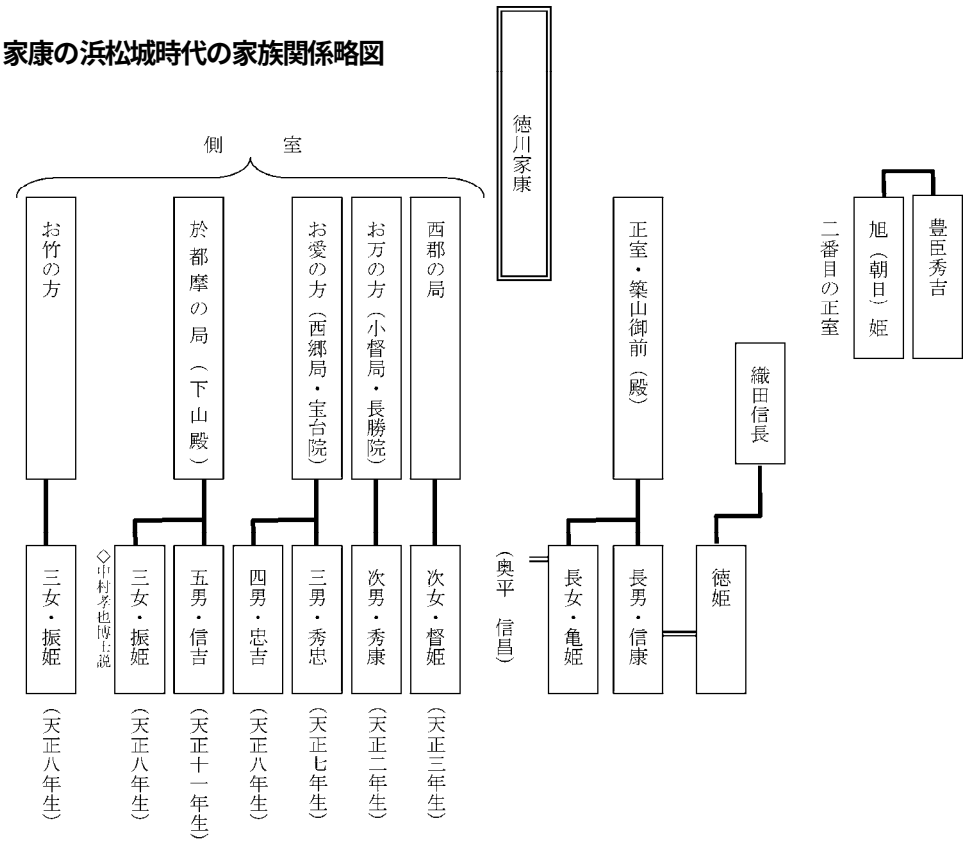
（5）　築山御前の肖像画について

『浜松市史三』のP596 に「和田村篠ヶ瀬には鈴木白華(肇)があった。西来院蔵の築山御前像はその作である」とある。この記述により、西来院蔵の築山御前の肖像画は地元浜松地域で大正昭和時代に活躍した鈴木白華（肇）氏によって描かれたものであることがわかる。

◆中村孝也著『家康の族葉』のP240 に「築山殿は殺害せられ、信康は自害せしめられる悲劇が展開せられるのであるが、その真相を実証するに足る確実なる文書は、一通も発見することができていない」とある。

◆徳姫が書いたとされている十二ヶ条の手紙の実在は不明で、『改正三河後風土記』に収録されている八ヶ条のみが知られている。しかし、この文書を本当に徳姫が書いたものであるかは疑問が出されている。

家康の浜松城時代の家族関係略図



太刀洗池

西来院の築山御前の廟（月窟廟）

[７]信康の自刃事件

(１) 信康の誕生から天正７年４月までの動き

信康は永禄２年３月６日(1559,4,24)駿府で家康の長男として誕生し竹千代と名付けられた。永禄５年(1562)3 月に駿府から母と妹と共に岡崎に移る。永禄 10 年５月 27 日（1567,7,13）に９歳で同年齢の織田信長の娘徳姫と結婚した。元亀元年(1570)に家康が浜松へ移ると岡崎城をゆずられ、12 歳で岡崎城主となった。元亀２年８月 26 日(1571,9,25)に浜松城で元服し岡崎次郎三郎信康と名乗った。天正元年(1573)に 15 歳の信康が甲冑始めをして初陣を果したといわれる。天正３年５月(1575)の長篠の合戦に出陣した。

天正３年９月(1575)に小山城を包囲したが武田勝頼軍が来たので撤退した。このとき途中から殿軍を勤めた。天正４年(1576)に長女が誕生し信康は 18 歳で父親となった。天正５年(1577)に勝頼が来攻したが 10 月 20 日に大井川を越えて引いたので掛川から信康も 21 日に岡崎に帰った。天正 6 年 8 月（1578）に家康に従い信康も出陣し９月に帰陣した。11 月の初めに馬伏塚まで家康と共に出陣。天正７年４月 26 日（1579,5,31）に家康は夜のうちに馬伏塚まで出馬し、信康も吉田から馬伏塚へ出陣した。29 日に武田軍が大井川を越えたので帰陣し、信康は岡崎へ戻った。

(２) 信康の移送

『当代記』によると「家康が信康の態度や家来への処遇に問題があるので、忠次を信康の舅信長の所へ送り、信康らの処分の同意を求めた。信長は家康の意向を認めた」とある。『三河物語』には「信康の妻徳姫が信康の中傷を十二ヶ条かいて酒井忠次に持たせて、織田信長の所へ送った。信長は忠次に一つずつ問いただしたところ、忠次は十ヶ所もその通りと答えた。そこで信長は放置できないから切腹させよと命じた。忠次から信長の命令を聞いた家康は大敵に直面し、信長に背き難いので承知した」とある。『家忠日記』の記述から移送の様子は「天正７年８月３日、浜松より家康が岡崎にきた。４日、親子で話し合われたようで、信康は大浜へ退いた。5 日、家忠が岡崎にくると家康より早々に弓･鉄砲の衆をつれて、西尾へ行くように命じられて、家忠は西尾へ来た。家康も西尾へ移った。7 日、家康は岡崎へ行った。本城の番は松平上野、榊原小平太。９日、信康は大浜より遠州堀江城へ移された。10 日、家康より岡崎に来るようにとのことで、岡崎に来た。各国衆が信康へ音信をしないと起請文を出した。12 日には家康は浜松へ帰った。岡崎城には本多作左衛門が留守番となった。信康は堀江城から更に二俣城へ移され、大久保忠世があずかることになった。

(３) 信康の自刃

『家忠日記増補追加』に「9 月 15 日、三郎信康遠州二俣に於いて生害し給ふ遠州の住人天方山城守是を介錯す」、『浜松御在城記』は「9 月 15 日三郎様、二俣にて御生害、御歳二十一、御討手は天方山城守討奉る」とある。天正７年９月 15 日（1579,10,15）に二俣城で自刃して果てた。数え年 21。『家忠日記』の天正７年９月 15 日のところには「未刻より雨降」とあるだけで信康自刃の記述がない。信康廟は浜松市天竜区の清瀧寺にある。

二俣城址

信康廟

[８]高天神城の奪還

(１) 天正８年（1580,1,27～1581,2,13）の動き　家康 39 歳
・１月 16 日、家康は岡崎へ、24 日に西尾で鷹狩り。27 日は西尾から岡崎へ、２月 21 日浜松に帰った。
･3 月 18 日～２４日、大坂取出普請が行われた。
・3 月 25 日～28 日、中村取出普請が行われた。
・5 月 1 日、家康が掛川へ。2 日諸軍勢牧野へ。遠州衆は井籠まで陣取った。
・5 月 3 日、駿河国田中城を攻撃。
・5 月 5 日、徳川軍が撤退するとき、武田方の持船城の朝比奈勢が追撃してきたが石川数正の軍勢が迎え撃ち 32 人を討ち取った。家康は掛川城に入った。
・6 月 9 日、家康が横須賀まで出陣。
・6 月 11 日～17 日、ししかはな取出普請。高天神桶小屋に放火。
・6 月 18 日、稲をなぎはらい、三河衆が浜松まで帰陣。
・7 月 20 日、家康が掛川へ出馬。徳川軍は掛川山口まで出陣。
・7 月 21 日、徳川軍が井籠崎への川原で陣取る。22 日、小山筋に出動。
・7 月 23 日、石川数正が田中筋へ出動。25 日、小山筋に出動。
・7 月 26 日、徳川軍が帰陣し家康は掛川まで帰陣。27 日、家康浜松帰陣。
・9 月 20 日（1580,11,7）家康の四男福松（忠吉）が誕生。母は宝台院。
・10 月 22 日、高天神城をきわに徳川軍が陣取り、その後堀や柵、塀を普請して、高天神城を完全に包囲した。『三河物語』に「四方に深い堀を掘り高土塁を築き、高塀をかけた。城中よりは鳥も通わぬほどになった」とある。
・10 月 28 日、家康が馬伏塚に入る。
・12 月 20 日、織田信長の使者 4 名が陣所見舞いに来た。徳川方は出迎えに小笠まで来た。21 日に使者たちが陣場を視察。22 日使者が帰り、家康と酒井忠次が浜松まで同行した。
(２) 天正 9 年(1581,2,14～1582,2,2)の動き　家康 40 歳
・1 月 3 日からもいろいろな普請がおこなわれ、高天神城包囲網は厳重化。
・1 月 25 日、織田信長は水野忠重宛の書状で高天神城攻略について指示。
　その要旨は①城側の降伏要請に応じないこと。今後小山など城攻めをしても武田勝頼は出陣しないだろう。②信長は一両年内に駿河甲斐に出陣するつもりである。③勝頼が高天神・小山・滝坂を見捨てるならば、駿河の各城も押さえることができなくなり、駿河も自然と手に入る。信長は家康に高天神城の降伏を認めないで徹底的に攻撃して陥落させよという考えである。
・3 月 22 日(1581,5,5)の夜に高天神城の将兵が出撃してきた。徳川軍は迎撃し多くを討取り、または城内に攻め込んで陥落させた。高天神城を守っていたのは甲斐武田家直属の将兵ではなく駿河上野信濃などの武田家に服従させられた者であった。武田家直属の家臣で高天神城に目付として入っていた横田甚五郎は脱出して甲斐に戻り勝頼にほめられた。
・3 月 24 日、徳川軍は各々帰陣し、浜松まで来た。
・7 月 3 日～11 日、相良取出の普請がおこなわれる。
・9 月 30 日～11 月 14 日、浜松城で普請がおこなわれた。場所は不明。
・12 月 18 日、安土から西尾小左衛が来て信長が来春駿甲出撃を告げる。

[９]甲斐武田氏の滅亡

天正 10 年 3 月までの動き　甲斐武田家の滅亡

・1 月 14 日、家康が岡崎へ来る。

・2 月 1 日、信濃国福島城主木曽義昌が織田方に味方することを告げられる。

・2 月 2 日、武田勝頼が信濃国諏訪上ノ原城に入り、木曽義昌討伐を決意。

・2 月 3 日、織田信長が安土城で甲斐進攻の分担を発表。駿河から徳川家康関東からは北条氏政、飛騨からは金森長近、織田軍は信濃国伊那地方から攻め込むことになった。織田信忠の軍勢の先鋒隊が 3 日には出陣した。

・2 月 12 日、織田信忠が出馬、13 日土田、14 日岩村へと進み、高遠へ。

・2 月 16 日、小山城の武田軍が撤退。18 日に家康が掛川へ 19 日牧野へ。

・2 月 20 日、徳川軍が田中城を攻め 21 日に持船に陣取り家康は駿府へ。

・2 月 20 日、北条氏政が上野国へ北条氏邦、駿河国へ北条氏規の軍を派遣。

・2 月 28 日、武田勝頼が諏訪上ノ原城から新府城に帰陣。

・3 月 1 日、武田方の江尻城主穴山君信が織田方に味方すると家康に告げる。

・3 月 2 日、北条軍が駿河国の富士川以東を制圧。

・3 月 2 日、織田信忠の軍勢が高遠城を攻撃し、城主仁科盛信を討ち取る。

・3 月 3 日、織田軍が上諏訪方面へ進撃、武田勝頼が新府城に放火し退去。

・3 月 3 日、徳川先軍が駿河国興津から甲斐国万沢へ進出。

・3 月 5 日、織田信忠が上諏訪から甲府に入る。信長が出馬し近江国柏原へ。

・3 月 11 日（1582,4,13）武田勝頼一家は天目山のふもとの田子(田野)で織田方の滝川一益の軍勢に襲撃されて全滅した。勝頼らの首は甲府の信忠の所へ送られた。この日に家康は穴山信君と共に甲府の信忠の陣に参上。

・3 月 15 日、信長が飯田に着陣。18 日は高遠に陣取、19 日諏訪に到着(『家忠日記』には「3 月 17 日上様(信長)信濃諏訪迄御着にて家康御越候」とあり、信長が諏訪に着いたと聞くと家康はすぐに信長のもとに参上。)

・3 月 20 日、木曽義昌や穴山信君が信長の陣に参上。

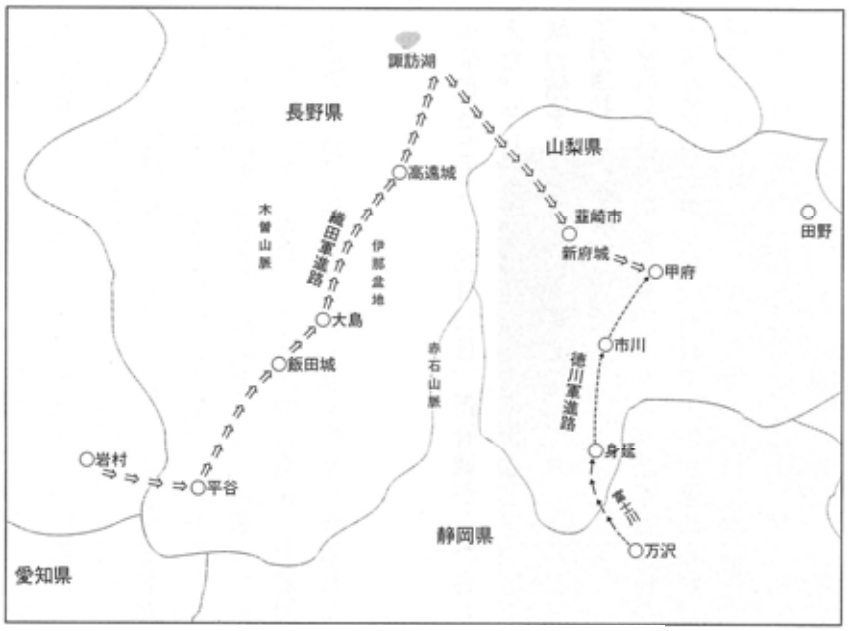
・3 月 21 日、北条氏政の使者が来て信長に品物を献上。

・3 月 28 日、信忠が甲府から信長のいる諏訪に到着。

・3 月 29 日、信長は旧武田領配分を決めた。甲斐国(穴山領を除く)と諏訪一郡を河尻秀隆に、駿河国を徳川家康に、上野国と信濃国の小県・佐久郡を滝川一益に、信濃国の高井水内更科埴科の四郡を森長可に、木曽谷二郡と安曇筑摩郡を木曽義昌に、伊那一郡を毛利秀頼に与えた。

・4 月 2 日、信長が諏訪を出発し、3 日に新府を経て甲府に入った。

◆武田勝頼の最期は大軍がぶつかり合い激しい合戦での大将らしく壮絶で見事な討死ではなかった。勝頼は大軍を率いて合戦にのぞんでいたのに、いつの間か一族に見放され家臣たちに逃げられて落人となり、山中をさまよって遂に妻子と僅かな人数と共に討死したのである。甲斐の国は東部の小山田氏と中央部の武田氏と富士川地域の穴山氏の三氏の連合の上に成立という見解もあり、信玄は長い年月をかけて甲斐全体をまとめて強力な軍団とした。勝頼は信玄死後の軍事活動などにより、親類衆や家臣たちの信頼を失った。富士川流域の穴山信君が織田方に通じ、武田家の信廉や信豊が離れ、甲斐東部の小山田信茂も見捨て武田軍団は分解消滅した。この後、信廉信豊信茂も殺された。



甲斐への織田･徳川両軍の進路

高遠城址

新府城址

［１０］織田信長の駿遠三巡視と徳川家康の接待

・天正 10 年 4 月 10 日、信長は甲府を出立し右左口(うばぐち)に陣取った。
家康は念入りに通路を点検させ、鉄砲の邪魔にならないように長い竹木を皆切り道を広々と作った。
・4 月 11 日、信長は暁方に出発し、左右口より高山へ、峠を越え本栖へ。家康は谷間に御茶屋や馬屋を立派に建て酒肴を提供。坂では左右の大木を切り倒し道を作り石を除いた。本栖にも御座所を建て豪華で輝くばかりに造り、二重三重に柵をつけた。諸土の小屋が千軒余り御殿の四方に作る。
・4 月 12 日、信長は未明に本栖を出発し富士山のふもとを進み大宮へ。
家康は大宮の神社(富士宮浅間大社)内に御座所を建てた。一夜の陣宿ではあるが金銀をちりばめてそれぞれの普請は美しく接待も並ではない。
・4 月 13 日、信長は大宮を出発し浮島ヶ原より足高山を左に見て富士川を渡り蒲原へ。家康は御茶屋を建て酒肴を提供。地元の人が和歌宮の由緒などを説明。浜辺を進み、由比、清見が関へと向い江尻の南山を越え江尻城へ。
・4 月 14 日、信長は江尻城を出立し駿府から田中城へ。家康は駿府町口に御茶屋を、宇津の山辺の坂口に屋形を建てて酒肴を提供。
・4 月 15 日、信長は田中城を出立、瀬戸川・大井川を渡り掛川城へ。家康は瀬戸の川端と小夜の中山に御茶屋を立派に建てて酒肴を提供した。
・4 月 16 日、信長は掛川を暁方に出立し、見附を経て池田宿より天竜川へ。家康は天竜川に船橋をかけた。信長の行列を渡すためであるので国中の人数で大綱数百本を引き船を寄せ集め非常に丈夫で立派につくりかけた。川の中や橋の前後に堅く番人をおいた。信長一行はこの船橋を通り浜松城へ。『信長公記』の筆者は「この橋だけの造作でも費用は大変なものである。国々遠国まで道を作らせ江川には船橋をかけ路辺に警護の兵を置く。各宿泊地には屋形を建て道路の辻々には茶屋馬屋をつくられた。信長へ出される膳の用意には京都などへ人を派遣し諸国で珍奇な品物を調達した。家康の信長への崇敬は非常なものである」と記している。
・4 月 17 日、信長は浜松を暁方に出発し今切を渡り汐見坂を越え吉田へ。家康は御座船を用意し酒肴を提供した。伴衆の船も数多く集め、前後に船奉行をつけて油断なく湖を越えさせた。
・4 月 18 日信長は吉田から知立へ。その後清洲・岐阜を経て２１日安土へ。
◆一般的によく云われることであるが「家康はケチであった」と。事実家康の三河国松平家は今川氏の支配を受け貧しく、自立後三河を平定し遠江へ進出してからも裕福ではなかった。その理由は各地の地元の武士たちの領地を取り上げてしまわないで、領地所有を認めて家康に従わせたからである。また戦いの連続で合戦の費用も大きかった。しかし信長の駿遠巡視の接待は駿河一国を与えられたお礼と共に信長に対する忠誠心を具体的にしたといえよう。この事実から家康がどうしても必要な出費ならば決しておしむことはしなかったという面を忘れてはならないであろう。

[１１]本能寺の変と北条氏との戦い

(１) 天正 10 年 5〜12 月の動き
・5 月 11 日、家康は安土参上のために岡崎へ。
・5 月 15 日、家康・穴山信君(梅雪)等が安土に到着した。
・5 月 19 日、惣見寺で幸若舞を見物。20 日、梅若大夫の能を見物、桟敷席内に近衛公信長公家康公穴山公梅雪等。芝生席に小姓衆馬廻り年寄衆と家康の家臣。
・5 月 21 日、家康は信長から京都・堺への遊覧を勧められていたので京都へ。
・5 月 29 日、秀吉の要請を受けていた信長は京都に入り本能寺に宿泊した。
同日、家康一行は堺に到り、松井友閑が接待した。
・6 月 2 日(1582,7,1)未明、信長は明智光秀の軍勢に襲撃され応戦後自害。
・6 月 2 日、家康から堺から京都へ向う途中で先発させていた本多忠勝が茶屋四郎次郎と戻ってきたのに出会うた。忠勝は信長信忠の死(本能寺の変)を報告。家康一行は伊賀を越え伊勢に出て三河へ脱出することにした。宇治田原へ入り信楽へと進み拓殖に到り鹿伏兎(かぶと)を経て伊勢湾岸の白子に出た。そして伊勢湾を船で渡り大浜に上陸し 4 日に岡崎に帰った。
・6 月 5 日、家康は明智光秀討伐の軍をおこすために準備を命じた。
・6 月 6 日、家康は武田の旧臣岡部正綱に甲斐国巨摩郡下山に築城を命じた。
・6 月 13 日、山崎合戦がおこなわれ、羽柴秀吉軍が勝利し明智光秀軍敗走。
・6 月 14 日、徳川軍が鳴海まで出陣。17 日、酒井の軍勢が津島へ陣替え。
・6 月 19 日、北条氏直軍が上野国で滝川一益軍を破った。滝川は伊勢国へ。
・6 月 19 日、秀吉の使者が来て、京都は平定したので徳川軍に撤兵を要求。
・6 月 21 日、家康・遠州衆・三河衆が帰陣。
・7 月 3 日、家康が浜松を出発し掛川・田中・江尻へと進み富士川越。
・7 月 7 日、家康は大宮に到着し諏訪への出兵を命じた。9 日に甲府に到着。
◆信長の死後、諏訪の武士が立ち上がり、諏訪頼忠が高島城に入った。
・7 月 12 日、北条氏直軍が上野国から碓氷峠を越えて信濃国に侵入した。北条軍は小諸を攻めた。家康が先発させていた依田信蕃が小諸から退去。
・7 月 18 日、徳川軍が諏訪に着陣。
・7 月 22 日、酒井忠次と諏訪頼忠との交渉が決裂し、徳川軍が高島城攻撃。
◆北条氏直は川中島へ進出しようとしたが上杉景勝に占領され、甲斐へ向う。
・8 月 1 日、北条軍が進出して来るとの情報を受けた徳川軍は白須に移動。
・8 月 3 日、徳川軍は乙骨(長野県富士見町)に布陣した。
・8 月 6 日、北条氏直軍 2 万余が押出し 2 千余の徳川軍は新府まで撤退。
◆氏直は真田昌幸や諏訪頼忠を味方につけ、大軍の威力で徳川軍を信濃国から追い出し、甲斐国へと後退させた。そして氏直は甲斐国の若神子に本陣。
・8 月 8 日、家康が甲府から新府に物見に移る。10 日家康は新府城に本陣。
・8 月 12 日(1582,9,8)、甲斐国の東部の黒駒で相州から来た北条軍を徳川の鳥居元忠等が奇襲攻撃をかけて勝ち敵の首を 300 余取った。
・8 月 14 日、徳川軍は取った首を若神子の北条軍に見えるようにさらした。
◆若神子の北条軍 2 万余と新府の徳川軍 1 万弱とが激突するような大会戦はおこなわれず、刈田や小競り合い程度で膠着状態が続いた。氏直に従属した信濃の武士たちも期待はずれの感想をもつようになった。家康は彼等に働きかけて真田昌幸を寝返らせ味方につけた。真田昌幸は碓氷峠に布陣して氏

直軍の糧道を断つようにした。氏直軍は大軍で食糧不足は問題となった。家康も自力で氏直軍を撃破したり追い返すことができなかった上に、故信長の息子の信雄や信孝から北条と和議を結ぶように勧告がきていた。

・10 月 29 日(1582,11,24)、北条氏直と徳川家康との和議が成立した。
主な条件は上野国全体を北条の領地とし、甲斐・信濃は徳川領とするものであった。また家康は次女督姫を氏直に嫁がせることを約束した。氏直軍は撤退し、家康も甲斐・信濃の各地域の責任者を決定した。

・12 月 11 日、家康は甲府に主な家臣たちを集めて帰国を命じた。

・12 月 19 日、北条氏直と家康次女督姫の結納がおこなわれた。

(２) 天正 11 年(1583,1,24～1584,2,11)の動き　家康４２歳

・1 月 18 日、家康は尾張国星崎で織田信雄（のぶかつ)と会見。

・家康は 3 月 28 日から 5 月 8 日まで甲府に滞在。

・4 月 21 日(1583,6,11)賤ヶ岳の戦いで秀吉軍が柴田軍を破った。

・4 月 24 日、秀吉は越前国北庄城を攻めて柴田勝家を自刃させた。

・5 月 9 日、家康が甲斐から浜松に帰った。

・5 月 18 日、柴田勝家に味方した織田信孝を織田信雄が命じて切腹させた。

・5 月 21 日、家康は石川数正を坂本城にいた羽柴秀吉のもとに遣わした。

・8 月 15 日、家康の次女督姫が小田原の北条氏直に嫁いだ。

・8 月 24 日、家康は甲斐へ向けて浜松を出発。

・10 月 2 日、家康は甲府から駿河国江尻に移り 11 月 15 日まで滞在。

・11 月 15 日、家康は駿府に移って滞在し、12 月 4 日に駿府から浜松へ。

北条氏との戦い関係略図

若神子城址

黒駒激戦地

[１２]秀吉との戦い

天正 12 年(1584,2,12〜1585,1,30)の動きと小牧長久手の戦い

◆秀吉が自ら天下人になろうとする動きに対して故信長の次男信雄は家康に援助を求めた。家康はかつての同盟者の織田信長の遺児信雄を支援するためという戦う名目が立つことから、共同して秀吉と戦う覚悟を決めた。そして自領の守備のために浜松に大久保忠世、岡崎に本多重次、掛川に石川家成などを置き、酒井忠次、石川数正、本多忠勝、榊原康政、井伊直政等を率いて出陣することにした。

・3 月 3 日、家康は三河・遠江で徳政を実施した。

・3 月 7 日、家康は尾張への出陣命令を出し浜松を出発。9 日岡崎を出発。

・3 月 13 日、家康は織田信雄(のぶかつ)と清洲で会合。秀吉方の池田軍が信雄側の犬山城を占領したとの情報を受けた家康が小牧山へ陣を移す。

・3 月 17 日、秀吉方の森長可が羽黒に出陣。酒井忠次・奥平信昌等が攻めて破る。家康は酒井・奥平等に追撃をさせないで、引きあげを命じた。

・3 月 18 日、家康が榊原康政に小牧山の城跡の修築を命じた。

・3 月 28 日、家康は小牧山城に本陣を移す。秀吉が小牧原（楽田）に布陣。

・3 月 29 日、信雄が小牧山城に入る。小牧山の城に陣取る徳川・織田軍に大軍の秀吉は攻め上がることができず、家康も大軍の秀吉軍に攻め下ることはしないまま、全面的な合戦はなく膠着状態となった。このため秀吉軍は徳川の本拠地のひとつである岡崎城へ攻め込む作戦を立てた。

・4 月 8 日、秀吉は池田恒興等の別働隊に 2 万余の軍勢を与えて、出撃させた。家康は秀吉軍出動の報告を受けて先発隊を出し、自ら信雄と共に出陣した。

・4 月 9 日、徳川の先発隊が、秀吉の別動隊の後部の部隊を襲撃し敗走させ引き返してきた池田恒興・森長可を家康・信雄の本隊が長久手で討ちとった（長久手の戦い）。秀吉は長久手での敗軍をきき大軍を率いて出発したが、長久手に着いたときには、徳川軍は小幡城に引き上げた後であった。

家康は夜に小幡城から小牧山城に戻ってしまい、翌日に秀吉も楽田に帰陣。

◇家康は長久手での勝利を大々的に宣伝したが、秀吉にとっては局地戦におけるひとつの敗戦に過ぎなかった。これ以降は再び膠着状態が続いた。

・5 月 1 日、秀吉が小牧原（楽田）から美濃国へ移動。3 日に信雄が長島へ。

・7 月 5 日、家康が伊勢筋へ。13 日には清洲へもどった。

・7 月 29 日、秀吉が岐阜から大坂に帰着。この後いろいろな動きがあるが大きな合戦はなく、決着がつかなかった。そこで秀吉は信雄に的をしぼり信雄の領地に軍を進めて圧力をかけ、信雄に講和を決意させる方針をとる。

・11 月 6 日、秀吉軍が信雄の領国の伊勢国桑名に進出。

・11 月 11 日、信雄は家康に相談しないで秀吉との講和を結ぶことにした。

・11 月 15 日、信雄と秀吉が桑名の川原で会見。家康はこの会見には欠席。

・11 月 16 日、家康は故信長の息子を援助するという名目を失い岡崎へ。

・11 月 21 日、家康は浜松に帰った。この後、秀吉から人質の要求あり。

・12 月 6 日、秀吉の養子（人質）に家康の次男義伊が決まり 12 日に出発。

・12 月 14 日、織田信雄が浜松に来て家康と会見した。

・12 月 25 日、佐々成政が吉良で織田信雄と会見。浜松で家康と会見した。

[１３]上田城の攻防

天正 13 年(1585,1,31～1586,2,18)の動き　家康 44 歳
・1 月 16 日、家康は岡崎へ。2 月 1 日に浜松へ帰る。
◆秀吉が前年徳川方に味方した根来寺を 3 月に、雑賀衆を 4 月に討伐。四国の長宗我部元親を 5 月に降伏させた。
・7 月 11 日（1585,8,6）、秀吉が関白に就任。
・7 月 19 日、病気が治った家康が浜松から駿府に赴く。駿府城の修築計画
◆上田城の攻防－信濃国上田の城主真田昌幸は家康から上野国の沼田領を北条氏に渡すようにと命令を受けたが「沼田は家康から拝領した土地ではなく自力で取った領地である。しかも家康が約束した恩賞の一部さえもらっていない」と拒否した。そして越後国の上杉景勝と結び秀吉に通じ、徳川軍の襲来を予想して上杉の援軍を受入れた上に様々に作戦を立て備えた。
・8 月（閏 8 月説もある）に甲斐信濃に配置していた大久保忠世・鳥居元忠・平岩親吉・柴田康忠等に上田城を攻撃させた。昌幸の巧妙な作戦に敗走。
・閏 8 月 2 日には真田信之が徳川軍と国分寺付近で戦い勝利した。
◆上田城攻撃に失敗した徳川軍は丸子城外で戦ったが、丸子城攻略も失敗。
◆家康は上田での様子を聞き、大須賀康高・井伊直政・松平康重等に軍勢を与えて上田に派遣した。大須賀・井伊らも上田城を攻略できず、撤退した。
◆『家忠日記』には上田城攻撃に関する記述がなく出陣・攻撃・撤退の正確な日付は不明。撤退は 9 月 26 日説がある。
・8 月 8 日、秀吉が大軍を率いて京都を出発。20 日に越中国へ侵入した。
・8 月 28 日夜、佐々成政は剃髪して秀吉に降伏。信雄等の願により助命。
・9 月 15 日、家康が駿河から浜松へ帰城。
・9 月 25 日、家康は吉田へ。30 日に西尾から岡崎へ。10 月 3 日浜松へ。
・10 月 28 日、浜松城で家康は家臣を集めて秀吉が要求した人質を出すかどうかを談合した。秀吉へ人質を出さないことに決定した。この日に北条氏から家老衆 28 人の起請文が届き、徳川方も起請文を送った。
◆家康は徳川家の団結のために家臣から人質を浜松へ出させた。
・11 月 13 日(1586,1,2)、石川数正が岡崎城から妻子を連れて出奔した。
・11 月 16 日、家康は岡崎城に入り家臣たちを集めて対策を協議。
　①岡崎城の修築を 11 月 18 日に開始 12 月 2 日に一応工事終了
　②徳川の軍制を改めるため信玄の軍制を研究させ、全てを信玄流に改正。
　③岡崎城を守る城代に本多重次を任命。
　④信濃国の小諸城に在番していた大久保忠世を浜松に呼びもどした。
◆上田城攻略に失敗したが信濃国や甲斐国の徳川軍は上田城攻撃以前の状態にもどっていた。それ故小諸の忠世が急いで帰ると三河は混乱し早くも忠世が落ちて行ったと思われ、上田城の昌幸が小諸城を占領するであろう。
信濃や甲斐の地元武士の動揺も心配されるため忠世はすぐには応じられないでいた。しかし家康が度々使者を出したので、忠世は弟に任せ浜松へ。
・11 月 28 日、秀吉の使者が来て家康の上洛を要求。家康は上洛を拒否。

[14]徳川家康の上洛と駿府城への移転

天正 14 年(1586,2,19～1587,2,7)の動き　家康 45 歳
・1 月 10 日、家康は浜松から岡崎へ。27 日に織田信雄が来て会合した。
・3 月 8 日、家康が駿河国と伊豆国の国境を越え北条氏領の三島に赴いた。
・3 月 9 日、家康は北条氏政、氏直父子と会見し、北条氏との関係を再確認。
・3 月 11 日、徳川領の沼津に北条氏側が来て会見。家康は米一万俵をおくり沼津の城の一部を取り壊すなどして北条氏に対して感謝を示した。
・3 月 21 日、家康は浜松に帰った。
◆秀吉は家康を上洛させようとして異父妹旭姫を離別させた上で、家康の正室に送り込むことにした。正室として嫁がせるといっても、家康を上洛させるための人質であることは秀吉・家康双方ともに承知であった。
・4 月 23 日、本多忠勝が祝言の使者として大坂へ出発した。
・5 月 12 日、旭姫一行が吉田に到着した。輿は長柄の輿が 12 挺、釣輿 15 挺。代物 3 千貫。金銀２駄。御道具は数知れずと記録されている。
・5 月 14 日(1586,6,1)旭姫一行が浜松に到着し、浜松城で祝言が行われ旭姫は家康の 2 番目の正室となった。そして旭姫と家康の後継者である三男の長丸（秀忠）と母子の盃をかわしたとされる。この後約７か月半の間旭姫や秀吉がつけた老女や侍女たちが浜松城のどこにどのように生活していたのかなど詳しい記録が見当たらない。16 日に祝の御能が催された。
・5 月 26 日、榊原康政が婚儀無事終了の報告のため秀吉の所に赴いた。
・7 月 17 日、家康は昨年失敗した上田城攻撃再開するため駿府まで出馬。　秀吉は家康の計画を知り、真田昌幸を説諭し家康にも中止を要請。
・8 月 20 日、家康は上田城再攻撃を取りやめて駿府から浜松に帰った。
・9 月 11 日、駿府城に仮に移転する儀式（御屋渡りの祝言）が駿府で挙行。
◆秀吉は上洛を拒否しつづける家康に秀吉の実母まで人質に出すという。秀吉の覚悟を理解した家康は家臣たちの反対を押し切り上洛を決意した。
・9 月 26 日、家康は上洛することに決定。10 月 14 日に浜松を出発した。
・10 月 18 日、秀吉の実母大政所が岡崎城に到着。
・10 月 20 日、家康は酒井忠次・本多忠勝・榊原康政等の軍勢と共に出発。
・10 月 26 日、家康は大坂に到着。秀吉が突如宿舎に来て家康と歓談。
・10 月 27 日、家康は大坂城に登り、諸大名の前で秀吉に臣従を誓う。
◆秀吉から家康に白雲つぼ、正宗の脇差等が、家康から秀吉に金子等進呈。
・11 月 1 日、家康が京都に到着。5 日に家康と秀吉の弟秀長が正三位に。
・11 月 8 日、家康一行は京都を出発。11 日に岡崎に帰着。
・11 月 12 日、秀吉の実母大政所が岡崎城を出発して帰国の途につく。井伊直政が警護と送り役として同行した。
・11 月 16 日に旭姫が、20 日には家康が浜松へ帰った。
・12 月 4 日(1587,1,12)家康は浜松城から駿府城へ正式に移った。これ以降家康は浜松城に住むことはなかった。なお駿府城は家康が移ってからも工事が続けられ天守閣などの普請が完了したのは天正 17 年である。しかも家康が移った頃の駿府城の概観などの様子はわかっていないようである。

奥付